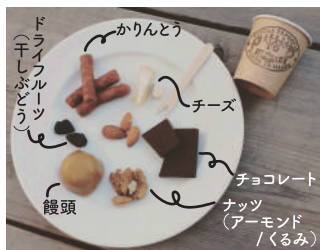




コーヒーライフをもっと楽しく♪

みなさん、コーヒーは好きですか？好きな人はさらに楽しく、苦手な人も好きになってしまうかもしれないコーヒーの楽しみ方が色々あります。そのひとつが「フードペアリング」、好みのコーヒーと相性の良い食べものの組み合わせを見つけ出し楽しむ方法です。

APLA が販売するコーヒーの中でのおすすめ例としては、香りや酸味が特徴のキリマンジャロには果物を使った食べものやチーズなどの乳製品。しっかりとした苦味やコクがあるルワンダにはガトーショコラやクッキーなどのバターやクリームを使ったスイーツ。甘みと良質の苦味があるラオスはお饅頭や大福などの和菓子と相性が良いのです！私は酸味が強いコーヒーが苦手でしたが、ドライフルーツを食べてからコーヒーを飲むと、お互いの酸味が高まり合って一気に口の中に甘みが広がり、苦手な味のコーヒーも美味しく飲めました！



一口かじって一口飲んで、パートナー探し！

ぜひ、みなさんも今お手元にあるコーヒーの「パートナー」を探して、コーヒーライフをより楽しいものにして下さい！

寺田俊(てらだ・しゅん / APLA)



特定非営利活動法人APLA (Alternative People's Linkage in Asia) フィリピン・ネグロス島での20年以上の経験を活かし、「農を軸にした地域づくり」のためのネットワークの構築を目指して、出会いや交流の場の創造を進めています。【HP】<http://www.apla.jp>



株式会社オルター・トレード・ジャパン(ATJ) バランゴンバナナやエコシュリンプなどの食べ物との取引で、生産者と消費者を顔と顔の見え関係でつなぎ、人と人、自然が共生できる社会づくりを目指しています。【HP】<http://altertrade.jp/>

過去のニュースはこちらからご覧いただけます。
<http://www.apla.jp/archives/publications-cat/ptop>

人から人へ
2016.10 vol.7
特定非営利活動法人 APLA/あぶら(株)オルター・トレード・ジャパン(ATJ)
〒169-0072東京都新宿区大久保 2-4-15サンライズ新宿3F
TEL:03-5273-8160 FAX:03-5273-8667 E-mail:info@apla.jp



●様々なテーマでアジアならではの事情をお伝えします。

東ティモールの政治事情

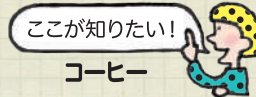
2016年5月で独立(主権回復)から14年を迎えた東ティモール。首都のディリでは道路や橋がきれいに整備され、立派な建物の建設も進んできました。けれども、政府は大規模な開発計画ばかりを優先し、人びとの暮らしを支える農業・保健・教育などの政策は後回し。この間、国内の貧富の格差が目に見えて拡大しています。

大規模開発計画を推し進めているのは、現政権で計画戦略投資相をつとめるシャナナ・グスマン(初代大統領、前首相)を中心とした勢力。飛び地のオイクシを経済特区にする計画や南部海岸開発計画については、政治家や役人たちの汚職の温床となっているとの批判が地元メディアやNGOなどからあがっていますが、シャナナ率いる大連立政権が幅を利かせる野党不在の国会は、湯水の様子に予算を計上し続けています。

一方、そうした動きを批判しているのが、タウル・マタン・ルク大統領です。東ティモールの大統領には政治的権限はありませんが、国会の場でシャナナなどを名指しで批判し、政府との対立を強めています。タウルは、2012年3月の就任以来、市民との対話集会のために全国各地の村落を精力的に周り、市井の声を受けて、開発利権を支える政府に対して異を唱えています。来年2017年は、5月に大統領選挙、7月に国会議員の選挙が予定されている選挙イヤー。政局の行方を注視したいと思います。

野川未央(のがわ・みお / APLA)

美味しいコーヒーの淹れ方



- 1. コーヒー抽出の準備**
コーヒーサーバーにドリッパーをのせ、フィルターをセットします。粉の量はカップ1杯あたり10g程度が目安です。お湯が沸騰したのち1分ほどおいてから抽出を始めます。使用のお湯は軟水を沸かしたものが良いでしょう。
- 2. 1回目の抽出(蒸らし)**
粉の中央部から、粉の表面に少量ずつのお湯をゆっくりと、むらなく均等に注ぎます。粉の表面全体が湿ったら、注ぐのを止めて30秒ほど蒸らします。蒸らすことで、粉の繊維が広がり、抽出する準備ができます。
- 3. 2回目の抽出**
「の」の字を描くようにドリッパーをまわしながら数回抽出を続けます。

ポイント①

お湯は、ペーパーフィルターにできるコーヒーの土手を崩さないように、真ん中を中心に注いでください。

ポイント②

サーバーの人数分(コーヒーの粉の量分)のメモリまで抽出したらドリッパーを外しましょう。最後まで落とし切るとコーヒーの雑味やえぐ味などが混ざってしまいます。

ポイント③

1回目の抽出(蒸らし)～2回目の抽出完了まで約3分間が目安です。粉の量を多め、抽出時間を長めにする、より濃い味わいのコーヒーが楽しめます。お好みで最高一杯をお楽しみください。

中村智一(なかむら・ともかず / ATJ)



パレスチナ人民連帯国際デー

毎年11月29日は、国際連合(以下、国連)が定めた「パレスチナ人民連帯国際デー」です。「世界トイレの日」と並んで国際デーに位置付けられているこの日は、特に昔からパレスチナに住んでいた人びとやその親族から見れば、10年間我慢して腸内に溜め込んだガスを一気に連中の顔面に目掛けてダイレクトに放屁してやりたいと思うほどに(それができないので、彼らは石を投げたり火炎瓶を投げたりして抵抗していますが)、黙って過ごすことのできない日として心に刻み込まれています。

「パレスチナ人民連帯国際デー」制定は、去る1947年11月29日、国連がパレスチナの地を「ユダヤ人向け」と「アラブ人向け」に分割するという決議を採択したことに端を発します。この時点で、多くの人びと(パレスチナ人がこの地に住んでいましたが、同決議をきっかけとして翌年5月に現在のイスラエルの建国が宣言され、その地に住んでいた多くのパレスチナ人(主にアラブ人)が自分たちの土地を追われて難民となりました。では、パレスチナ人は全く無関係な第三者が寄り集まって二分割するという理不尽な採択が、何故なされたのでしょうか？

そもそも、「パレスチナ」という言葉は、地中海東岸・シリアの南側一帯を指す呼称として、ローマ時代から用いられてきました。パレスチナは、「ペリシテ人の土地」という意味で、ローマ時代以前にこの地に存在していた古代イスラエル王国を滅ぼしたローマ帝国が、ユダヤ教に関する言葉をなくすという目的で付けた地名とされています。ペリシテ人というのは、この地に入植して住み着いていた民族で古代イスラエルの主要な敵として知られています。後述の通りこのようにローマ帝国によって、各地にユダヤ人

が離散したことも、その後のパレスチナ問題の一端を担っているといえるでしょう。

その後パレスチナは、かの有名なナザレのイエスがこの地で誕生し、受洗して布教した後、処刑された場所として知られるようになり、16世紀にはオスマン帝国がこの地を支配し、ユダヤ教・キリスト教・イスラム教の全てにとつて重要な聖地として存在する一方、これらの宗教を信仰する人びとが共存してきました。重要なのは、彼らが特に大きな争い事もなく共存してきたことであり、また前述の通り、そのパレスチナの地に住んでいた「パレスチナ人」がいたという事実です。現在のパレスチナ問題は、あたかも根深い宗教上の対立・紛争であるかのように報じられることもありますが、必ずしもそうではありません。

2000年前の離散以降、ユダヤ人は世界各国に居を移し、彼ら独自の信仰とそれに基づく行動規範を守ってきました。しかし時には、それを異端と捉える周囲の人びとから迫害を受けることも少なくありませんでした。そのようなユダヤ人の中で、かつての祖国である古代イスラエル王国のあった地、つまりパレスチナに、ユダヤ人国家をつくるというシオニズム運動が展開していきました。

その結果として、19世紀以降、多くのユダヤ人がパレスチナの地に移住しました。この運動の標語として有名なのが「土地なき民に、民なき土地を」という言葉ですが、パレスチナの地にはすでに多くのパレスチナ人が住んでいたことはご説明した通りです。つまり、シオニズム運動は、このような事実を隠蔽し、「2000年前に離散したかわいそうなユダヤ人が、自分たち

の力で誰に迷惑をかけることもなく土地を取り戻し、国を再建する」というような美談を掲げ、1948年のイスラエル建国にこぎつけたものであると言えます。

特にユダヤ人の多い米国を筆頭に、冒頭に述べた国連による分割決議案に賛成票が投じられ、その後連綿と続くパレスチナ問題につながっていきます。この「パレスチナ人民連帯国際デー」は、国際社会共通の問題として解決をしていくべきというところから、1977年に制定されました。しかし実際には、この日を契機にパレスチナ問題の解決に動くという実効性を持っていくわけではなく、また日本においては、国際デーはおろか、そもそもパレスチナという場所についても「何だか危ないところ」程度にしか認知されていないのが実態です。

実際に訪れるパレスチナは、古来より続くオリーブ畑の広がる閑静な地域です。もしこのような問題がなければ、今の100倍は観光客が訪れる風光明媚な土地として名を馳せていると思われれます。そしてこれが、本来のパレスチナの姿であるはずですが、誰も好き好んで石を投げているわけではありません。

今我々ができることは限られていますが、少なくとも同じ地球上に生きる人間同士、なぜこのような問題が起こっているのか、またパレスチナという地がどのような場所なのか、この日をきっかけとして少しでも伝えていきたいと考えています。

若井俊宏(わかい・としひろ / ATJ)